

保育の中の小さなこと 大切なこと

守永 英子

四月に入園してからひと月近く過ぎたこのごろ、子どもたちの様子に、変化が見え始めた。三歳から入園して一年間、幼稚園生活を経験してきた二十名の子どもに、十三名の新入児が混ざった四歳児のクラスである。

初めは、大人の助けもあまり必要とせず、自分たちで遊べるかのように見えた新入児たちであった。三歳から在園している子といっしょに、ぶらんこに砂場にと楽しんでいたH子。室内で、線路をつないで、汽車ごっこを充分楽しんでから、庭に出て行く新入の男児三人。A子も、去年からいるT子と、花摘みで忙しくとびまわっていて、保育室近くで、ぼつんとひとりでいる姿を見か

けることは、あまりなかった。庭に出て、そばに子どもたちと、遊び始めようとするとき、並んでいる顔が、一年間私が付き合ってきた子どもたちばかりなのに、驚いたり、苦笑したりということもあった。

ところが最近になって、三歳から来ている子どもたちが、自分たちの遊びを始められるようになってくると、新入の子どもたちの気になる姿が見え始めた。いつも線路をつないで仲良く遊んでいた三人の男児が、線路を離れてふざけ合い、それでも高じてくるとき、他の二人の楽しそうな様子に比べ、きまってT夫の表情が、楽しさばかりではないものに変ってくるのが気になってきた。

A子も、今日は、あまり人のいない砂場にぼつんと、ひとりでしゃがみこんで、小さな器に砂を詰めている。淋しそうに見えるA子の姿が気にかかって、私も砂場にはいった。A子は、私に関心を向けず、面白そうな様子もなく、前の動作を続けている。「働きかけようか、どうしようか」と迷いながら、「A子ちゃんは何をしているんでしょうね？」と、問うような、つぶやくような言葉をかけてみる。A子は、黙ったまま、今度はバケツに水を入れて、深くもななくぼみのあたりにあける。

「いっしょに、いてあげたい」「でも、どうやって？」あせりの中で、いろいろなことが頭の中を駆けめぐる。

「A子と同じように、器に砂を詰めることをしようか」それとも、「そばに大きな山をつくってみようか」「ほかに何か、A子とつながるような動き方はないか」「私が、迷いながらシャベルで砂を掘り返している間に、A子は、くぼみに水をあけることを繰り返す、その水があふれて流れ出した。

「そうだ、流れ出した水を受けとめよう」

私の迷いは、そこで、一挙に手がかりをとらえ、あふれた水を受け集めるように、一本の溝をつけた。A子の水が、流れる方向を見つけたかのように、集まり、私の溝を流れ出した。私は、A子のくぼみから直接に溝をつけはしなかった。そのくぼみからあふれ、とりとめもなく広がって、しみ込み、流れる水を、少し離れたところで溝に集めたのである。

A子と出会ってまだ一月足らず、触れ合いも少なく、A子の世界は、私にとっては、まだ未知のものである。

淋し気に見えるA子の様子は、私から見えたもので、その世界の中で、実際A子が何を感じているのか、私にはしかとはつかめない。私の働きかけにあまり反応を見せなかったのは、A子に私を受け入れる用意がないことではないか。と、すると、A子のくぼみに直接溝をつけて水を流すことは、A子の世界を侵すことであり、A子の水を奪い去ることである。そのような思いが、私を遠慮がちにした。

少し離れたところで、溝に流れ込む水に、A子は、ち

らと目をやった。「あ、流れてきた。川みたい！」私は、水が、A子とのつながりを作ってくれたことをうれしく思い、声に出した。A子は黙っていたが、今度は、流れ込む先を意識してか、せっせと水を流しはじめた。流しては川の方を見る。どうやら、細々ながら、つながったようである。

砂場の外で眺めていたK子が、初めは、「先生ったら、ひとりでお砂場してるの？」とおかしそうであったが、川が長く円周を作り、掘られた砂が真中に積み上げられてきた頃には、自分もシャベルを持って、川の続きを掘り始めていた。黙々と続けられる活動に誘われたかのようになり、砂場の人数が増え、「入れて」という改まったあいさつもかわされることなく、一つの活動に何人もが加わって、展開していった。

砂場の端で、遠慮がちに砂にさわっているM夫の方にも、川の流れを向けて行き、M夫の表情のほぐれるのを見届けてから、私は、しばらく離れていた保育室の様子をのぞきに行った。そして、その次の瞬間には、顔をつ

かみ合って叫んでいる二人の男の子の方へ、とんで行かなければならなかった。

そのあと、砂場の活動がどのように展開したか、見届けることはできなかった。いつも残念に思うのだが、保育者は、仕向けた結果を見届けることが、なかなかできない。一人が三十人以上の子どもの預かり、その一人ひとりを十分に活動させたいと思うとき、軌道にのったその場を離れて、他の子どものところへ行かなければならぬのである。保育者として、自分の働きかけた結果をじっくり見届けたいと願うのは、ぜいたくな事なのだろうか。

しばらくして、部屋の中で忙しく動いている私のそばのいすに、A子は黙って腰かけた。「よく遊んだわね。エプロンが汚れたからとりましょうね。」という私に、A子は黙って、うなずいた。A子から私への、かすかな接近であった。

(お茶の水女子大学付属幼稚園)